

戦争体験者の後世への思い

「Seven days war 闘うよ……」。TM NETWORKの名フレーズが今、頭の中でリフレインしています。宮沢りえさんの女優デビュー作としても知られる映画『ぼくらの七日間戦争』の主題歌でした。

1985年からスタートしたその原作小説、通称「ぼくら」シリーズは45巻に亘りなんと累計2000万部超。学園小説と謳(うた)いながら全共闘や新興宗教、環境問題や医療問題もテーマに取り入れた重厚な内容でした。常にその時々々の社会問題に一石を投じた作品をドラマチックに描き続けた作家の宗田理さんが4月8日に名古屋市内の病院で死去。享年95。死因は、肺炎との発表です。

今回は、肺炎という死因について、考えてみましょう。

2021年の総務省の調査によれば、



肺炎による死亡率は65歳を超えると急激に上昇することがわかっています。肺炎による死亡は65歳以上が98%を占めています。

年代別にみると、65~79歳では死因1位は悪性新生物(がん)、2位は心疾患、3位は脳血管疾患、4位

が肺炎です。80~89歳では、3位と4位が入れ替わります。90~94歳になると、心疾患が1位、悪性新生物が2位、肺炎が3位に。

95歳以上になると、1位に老衰が急上昇、2位が心疾患、3位が肺炎となっています。

この統計を見て感じるのは、高齢になればなるほど「肺炎と老衰のあいだ」がある、ということ。

80代を過ぎると、肺炎になっても発熱や咳(せき)などの症状が出にくくなります。無自覚なまま進行した結果、あっという間に、ずっと亡くなる場合もある。こうした限りなく老衰に近い肺炎のお看取りの場合、僕は「死因は肺炎にしましょうか? それとも老衰と書きますか?」とご家族に尋ねます。多くのご家族が、「では、老衰でお願いしま

す」と答える時代です。

宗田さんの死も、限りなく老衰に近い肺炎だとお見受けしました。宗田さんは1928(昭和3)年生まれ。少年時代は、戦争一色。学徒勤労動員として働き、特攻隊の訓練も受けて、常に死を意識して生きていたといえます。

宗田さんが亡くなる10日前に取材を受けたという<NEWSポストセブン>のインタビューでは、こんなふうに語っておられます。<世界大戦が終わって80年近く経った現代でも、大人たちは相変わらず戦争をやめない。嘆き呆れ、争いなどやめて助け合うことが大切。やさしい人になってほしいと願い、戦争を経験した大人として、後世に伝えていかなければならない>

戦争体験者がこの世からいなくなったとき、再び戦争が始まると言う人がいます。そうならぬよう宗田さんの想いを共有しましょう。



353

作家 宗田理

長尾和宏(ながおかずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。